

六月一日(日)

「茨木の川が、そんなに魅力的か？ どこにでもある風景だと思うけどなあ」

一兄は隣で運転しながら、心底面倒臭そうに言う。

「どこにでもありそうだけど、そこにしかないから良いんじゃない」

「いやいや、安威川も茨木川も大したことないって。有名な橋も別にかかってないし」

「橋がどうかじゃなくって、そういう自然を含めたシーンを良い感じに撮りたいんじゃない」

私がどれだけ力説しても、一兄にはピンと来ないらしい。彼は延々とブツクサ言いながら、ハンドルを握っている。ただ、せつかくの日曜日に、サンデードライブばかりで中々動かない一七一号線を箕面方面目指して走らされているのは、お願いした私もちょっとだけ後ろめたい。

「ローソンの先で、一七一行かずにこっちに曲がる、と」

下井のバス停を過ぎた辺りで、左手の細い道に入ってもらおう。細いとはいえ、バスが通れるだけの幅は十分にある。この先に、郡山宿本陣があるらしいけど、そのまま道なりに真っ直ぐ行ってもらおう。

「このまま勝尾寺川渡ると、車止めるところないぞ」

「良いから、このまま行つて。橋を渡つたところの、川沿いの細道が最高だから」
バスで箕面方面、豊川駅の方を目指すところでグツと曲がって、一七一号線に再合流する。バスに乗つてると一瞬しか見えないこの画角を抑えておきたい。

「道幅も狭いし、そんなに停めてられないって」

「じゃあ、私たちだけ降りよう。イイ？」

一兄の回答を待たずに、ルームミラーで後部座席の哲朗さんに視線を送る。彼はちよつと疲れた目で頷いた。私は早速ドアに手をかける。「分かったから、ちよつと待て。一瞬停めるから」

一兄は車を少し歩道に寄せて、車を止める。私たちが降りるのを待ち、後ろから来る車に気をつけながら、再び車を走らせた。奥の信号まで行って、右折をすするらしい。私は早々に視線を切り、右手に見える製紙工場、その奥に見える巨大

な倉庫を視界に入れながら、左手の勝尾寺川、眼前の広大な空を画角に収め、何枚か写真を撮る。

哲朗さんにもフレームに入ってもらい、再度映り方を確認する。フレームの中で背中を向ける彼は、撮影ボタンを押すごとに微妙に動いて、スマホを取り出した。彼は両手を口に添え、拡声器を作る。

「バス停前のセブンイレブンにいます」

一七一号線を茨木方面に戻ったところのセブンイレブンか。徒歩だとちよつと遠いじゃない。とはいえ、戻ってきてもらってピックアップするのも難しいと言うか、申し訳ない。哲朗さんがこちらに戻ってくる。一兄の車が辿ったであろう軌跡を、自分の足で追いかける。一兄はいつの間にか車を降り、コンビニでアイスを買ってお店を出てきた。

「え、自分の分だけ？」

私が呟くと、彼は手元の袋をガサガサさせて、哲朗さんにアイス差し出した。自分のアイスを啜えながら、私を見やる。

「お前の分はない」

一兄は、自分のアイスを私に渡そうとする哲朗さんを制し、「それは君の分」と付け加えた。

「お前は自分で買ってこい。隣のマックにシェイクもあるぞ」

一兄は、顎でマクドナルドの看板を指した。

シェイクも魅力的だけど、向こうまで歩くのもちよつと辛い。哲朗さんに視線を送ると、彼は微妙に目を逸らし、買い与えられたアイスにかじりついた。

初出 令和三年五月二一日 noteにて公開